

研究エッセイ

ESSAY

サハリン調査ノート

富井 正憲（神奈川大学工学部建築学科・助手）

第3班の「環境に刻印された人間活動—海外神社」グループ中島・大里・孫・藤田・富井5人のメンバーは第1回目の海外神社追跡調査を10月8日から13日まで、サハリンのユジノサハリンスク（旧豊原）を中心に行った。

戦前、日本人が海外に移住し、建設した神社の総数は568社と判明している。その地域は広く、アジアは勿論のこと、南洋やアメリカ大陸にまで及ぶ。日本人はどこに出かけるにも神社と畳を持ち運んだものをつくづく感心させられる。南樺太（現南サハリン）も其の例外ではない。さして広くはない島の中に、128社もの神社が建てられた。これは全海外神社の2割強にもあたる。樺太を最初の調査地を選んだ理由はこの高い比率に加えて、もう一つは樺太を代表する官幣大社樺太神社の存在である。規模といい、格といい、間違いなく海外神社の横綱級で、朝鮮神宮や台湾神宮と同様、その地の総鎮守として建てられた神社である。また、2万坪を超える広い境内の環境は今いかに変容しているのであろうか、実に楽しみである。

調査の時期は雪や氷に覆われない秋のうちとし、豊原（現ユジノサハリンスク）、真岡（ホルムスク）、泊居（トマリ）、野田（チェーホフ）、大泊（コルサコフ）の5地域に建てられた9つの神社と1つの表忠碑を選定する。入手した戦前の地図を頼りに、それぞれの位置を推定したり、当時の写真、絵葉書、図面等を準備する。併せてロシア側研究者への参加を呼びかけ、ユジノサハリンスク郷土誌博物館の研究者I.SAMARIN氏からの調査同行の返事を得る。

10月8日、札幌からプロペラ双発機に乗り換えて2時間、ユジノサハリンスク空港に到着する。機内で時計を2時間進め、現地時間に合わせる。ロシア側研究者SAMARIN氏の出迎えを受け、早速行程と調査対象を確認する。途中、市内本屋で現在の地図を求めが無し、(旧) 共産圏どこの国も地図の入手は難しい。

翌日早朝から、実質4日間の調査を開始する。各々建築探偵よろしく、山に登り、藪を掻き分け、土を掘り起こし、神社跡地を探して東奔西走の奮闘。調査は順調に進んでいったが、食事と宿は実に厳しかった。季節柄皿盛りの

毛蟹を楽しみに行ったのに、あまかった。食卓の上は黒パンかポロポロご飯、たまらず自由市場の朝鮮食材売り場に駆け込み、キムチを仕入れる。ホルムスクでは停電はするし、お湯は出ない。ゆるるローソク火の下で凍える体を縮める。翌日やっと出たお湯は鉄錆色、仕方が無い、温かいだけましと構わず入る。ペレストロイカ以後のロシアの現状をたっぷりと味合う。

途中2日間は雨に降られながらも、予定していた10事例は順調に終了、新たに7事例を加え、合計17事例の追跡調査を遂行した。この他、日本時代の住宅や銀行等の現存状況をも併せて把握できた。短期間でこれだけの調査を可能にしたのは、なんとといってもロシア側研究者の存在と協力のお陰である、感謝、感謝。改めて海外研究におけるカウンターパートナーの重要性を再認識する。

調査内容の詳細な報告は他の機会に譲るとして、今回の調査で深く印象に残った体験を1つここに披露するなら、やはりユジノサハリンスク市街を一望にする旧旭ヶ丘の中腹に建てられた樺太神社跡地を訪ねたときであろう。鮮やかな紅葉の並木参道を奥へ奥へと進んでいくと、元来なら伊東忠太設計の神明造りの壮大な神殿が立ち現れてくるはずのところ、突然、雨霽のなかから真っ白な建物が出現してきたときには、思わずあっと声を上げた。次いで、その瀟洒な白い建物が、戦後に共産党幹部のために建てられたクラブハウスであると知って、もう一度びっくり。まさに環境に刻印された人間活動の歴史の重さを深く実感した象徴的な一コマであった。



官幣大社樺太神社



樺太神社神殿跡地に建てられた旧共産党幹部用クラブハウス